

## 自殺対策とは 生きる支援である



清水 康之

(しみず やすゆき)

NPO法人自殺対策支援センター  
ライフリンク代表

# 不安に立つ

第15回

このコーナーは宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌名古屋教区教化運動方針「不安に立つ」をテーマに、宗門内外の方から寄稿いただいています。

仮にあなたの乗っている船が、嵐に巻き込まれて夜の海で転覆したとしよう。船から投げ出されたあなたは、きっと必死になつて、岸に向かって泳ごうとするのではないだろうか。

しかし、辺りは深い闇。助かりたい一心で懸命に泳いでも、そもそも岸がどこにあるのか分からない。岸に近づいているのか不安になり、体力が奪われていく中で、やがて気力もなえてくる。「もう駄目だ」「もう助からない」と、誰だつて、ある瞬間には、生きる道を諦めざるを得なくなるだろう。

それで亡くなつていくということだ。特に日本では、不況の嵐による「失業→生活苦→多重債務→うつ→自殺」「倒産→借金→家族の不和→うつ→自殺」といった危機経路が多い(私たちの調査では、自殺で亡くなった人は平均四つの要因を抱えていた)。社会的な問題が、人々の暮らしの問題に転化され、やがてそれが個人個人の心の問題にまで転化されていく。そうした先に、多くの自殺は起きているのだ。

ただ、「自殺は不況の問題だ」ということではない。不況が多くの人々の命を直撃してしまうような社会のあり方が問題なのである。端的に言えば、セーフティネットが機能していないということになる。特に、失業対策や生活支援など、国や自治体がせっかく行っている施策に関しての情報が、当事者に届けられていないことは重大な過失と言わざるを得ない。

夜の海で溺れている人を支援するには、

浮き輪をただ浮かべ、救護船の上で押し黙っているのでは不十分である。浮き輪をサーチライトで照らしてその場所を示し、助けに来たことを船上から大声で呼びかけなければ、支援策の存在すら気付いてもらえないからだ。

同様に、「支援策や相談窓口を作ったから、あとはそれを使うか使わないかは個人の勝手」という姿勢では、問題を抱えて自殺に追い込まれようとしている人たちへの支援にはならない。逆に支援策の存在を周知できれば、実は多くの人々は死にたくないのだから、自殺せずに生きる道を選ぶことになる。

自殺対策とは、そうした当事者本位の「生きる支援」であり、生きる意志があれば生かされる社会を作ることである。社会的な問題である自殺に対して、社会全体で対策に取り組むことが、いま求められている。

(4月号につづく)